

自蹊庵便り

令和八年 長月

NO 182

茶事折々

く先人達の遺芳に心寄する思いく

この夏は災害多き夏にございました。熊本に、千葉に…と大きな爪痕を残し乍ら、未だ残暑の厳しい中、逝く夏を一日一日咀嚼するここの日々でございます。

多くの皆様からメールやお見舞いを賜り、申し訳なく恐縮の日々にございました。

いつ何時何処で何が起きてもおかしくない時代に突入しているようなこちがいたしております。そして無事であることも奇跡中の奇跡、紙一重の命であることも、感じさせられる今日この頃にございます。

茶道に御縁のある方々なら、どなたもが

御存じの「和敬清寂」という言葉、余りにも耳慣れた言葉、でもこの頃思うのです。

本当の意味の「和敬清寂」とは、もつとつと深いところにあつて、天と人との和、或いは天と地との和、この天と地と人の和合を云っているのではなかったかと…。

八十余歳にして、今頃そのような当たり前のことも気付けなかったことも恥ずかしく思うのですが、…。台子が乾坤を表していることは、三十年余も前、恩師の門をくぐった時から教わっておりましたのに…。慣れ親しんだ言葉の落とし穴とでも申しましようか…。いつの間にか宇宙視野どころか地球視野にも至り得ていない思慮の乏しさに、貧しさに愕然としております。

天と地と人との調和、これこそが、生かされていることの最も調和した最高の形で

はないかと…。和敬清寂の言葉の意味、和が欠けても、敬が欠けても、清が欠けても、寂が欠けても、一つでは成り立たない、宇宙と呼応して始めて存在する気の世界、感応の世界である…と、仕事柄、生命個体としての自然との営みと少なからず、対峙しているほうだと自負しているところもありましたが、社会生活という物質優先の中に身も心もいつの間にか流されている自分があります。茶の湯という世界を通しての精神文化生活も含め、しっかり把握し、理解しているという、自負の中に、本質を見失ってしまっていたようです。

茶の湯においては、茶と湯があれば良し、だから茶の湯なのだ――！火相、湯相の調和、自らの体を動かし、静と動の美の調和、まさに茶の湯の茶道の世界とは、天と地と人との究極の調和を具現化したものでは、それも極めて完結に……です。

茶の湯の世界にとって大切な美意識の基準であつたはずなのに……。

常々、仕事柄か、茶の湯目線での思考回路に陥りやすいのですが、火と水の営み、すなわち、人類の原点の営みに、立ち返ってみれば、最もシンプルに地球の営みに辿り着きます。紹鷗さん、利休さんが考えた茶室というもの、そこにはまさに宇宙をぎ

ゅつと詰め込んで考察されていたはず。それ以前の珠光さん、能阿弥さん、吉政さん、室町時代までもルーツを辿れば、行き着くところは、宇宙にございました。

昔も、地震があれば、津波もあつたでしょう。今、温暖化という途方もない時代の渦からは逃れようもなく、右往左往している今人を貴人方は哀れに思うかもしれません。でもね、紹鷗さん、利休さん、聴いてくださいな。能阿弥さんも、珠光さんも耳

を貸してくださいませ。あなた様方が残してくださった茶と湯の世界、茶の道の世界、その偉大な精神文化は余りにも尊く、世界に誇れる文化として健全に今息づいております。その偉大な世界がまともである限り、天と地と人との和合、和敬清寂はそして、その尊い文化は次世代に必ず、正しく受け継がれていきます。

良質な水を守り抜くためにも、大自然の営みに畏敬と感謝の祈りを忘れない日本人のやまとびとの魂を信じています。

和漢三才図会の冒頭の言葉に「上は天文

を知り、下は地理を知り、中は人事を知らねばならない、この三つを俱ともに明らかにしてのち、はじめて人の疾病について語ることができる……」と、江戸時代の寺島良安という医者が書かれた本の一節にございます。

熊本の地震を始め、嵐のシーズン、線状降水帯は何処でも、いつでも起こりうるということ。天災多き日の本ではございますが、ゆえに風光明媚な恩恵を賜っていると、いう極東の小さな島国にございます。天災にあわれた被災地の多くの皆様に心よりお見舞い申し上げます。

令和八年、祈り多き逝く夏にございます。